

だ出ていなかった可能性もあります。来年4月からの本格検査が始まったときに、1回目の先行検査では異常がなかった子どもから、新たな異常が出てくる可能性が心配されます。

2012年度は、福島市や郡山市など約13万5000人の検査が行われました。とりわけ注視しなければならないのは福島市と郡山市です。福島市では約4万7000人が検査を受けて、273人が2次検査対象となり、11人ががん（疑いあり）が出ました。郡山市では約5万1000人を検査して、443人が2次検査対象となり、8人ががん（疑いあり）が出ました。郡山市での2次検査対象者のうち、発表された時点で実際に2次検査を受診しているのは182人で、そのうち8人ががん（疑いあり）というのは異常な事態です。まだ250人ほどが2次検査をやっている段階なので、さらに増えていくことが予想されます。

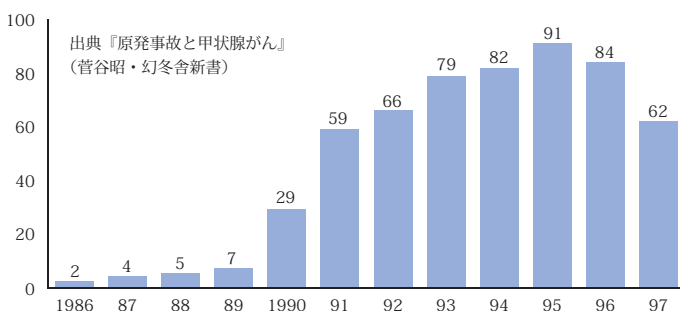
2013年度に入って、会津地域やいわき市での検査が行われています。特にいわき市は福島第一原発から30～40km圏内であり、どのような検査結果になるかわかりませんが、きちんと向き合っていかなければなりません。

きちんとしたエコー検査を

福島医大の甲状腺検査を受けた方の多くが「2、3分で終わった」と言われます。「1チームあたり1日100人」（検討委員会資料）を検査をするのですから、流れ作業のようにただ見るだけです。しかし、2～3分で結節が良性か悪性か、本当に異常はないのかという診断はできません。

結節が良性か悪性か、嚢胞の状況はどうなっているのかということを知りたいためには、少なくとも10～15分の時間をかけて検査をしなければなりません。

ベラルーシにおける小児甲状腺がん患者数の推移



検討委員会が発表した検査結果（8月20日）

	1次検査の結果確定	2次検査の対象	甲状腺がんと確定	甲状腺がんの疑い
2011年度	41,296人	214人	9人	4人
2012年度	135,586人	953人	9人	21人
2013年度	約17,000人	113人	?	?

	1次検査実施者	2次検査対象者	2次検査実施者	がん確定がん疑い
福島市	46,805	273	242	11
郡山市	50,997	443	182	8
いわき市	341	3	2	0

小児甲状腺がん発症率が100倍に

小児甲状腺がんは「100万人に1人か2人」とこれまで言われてきました。しかし、福島の子も18万人を検査した結果、甲状腺がんを確定しただけでも18人となっており、「1万人に1人」と100倍です。

ベラルーシ国立甲状腺がんセンターの資料によると、チェルノブイリ原発事故直後から小児甲状腺がんの増加が認められ、91年以降に急激に増え始めて、95年にピークを迎えています。甲状腺がんは子どもだけの問題ではなく、成人であっても被ばくによる甲状腺がん発症リスクは高くなっています。さらに低線量内部被ばくは、心疾患や免疫低下など、さまざまな健康への影響も懸念されます。【左下グラフ参照】

子どもだけでなく、大人も定期的な検査を行い、命と健康を守っていくことが大切です。

「震災関連死、直接死上回る 福島、避難生活疲れ」（9月8日毎日新聞）。8月末時点で福島県内で震災関連死と認められた人は1,539人、3月末発表から5ヶ月で156人が震災関連死で亡くなっています。

安倍首相は「健康被害はこれまでも、これからのもない」とオリンピック招致演説を行いました。原発事故によって家も仕事も奪われ、家族や地域の人々と引き裂かれ、震災から2年半がたっても仮設暮らしという、長引く避難生活のなかで、孤独死や自殺が絶えません。まさに政府・東電による大量殺人ではないでしょうか。被災者に寄り添った医療が本当に必要とされています。